

# 聖書の役割から読み解く「瓶詰地獄」

大島 梢

## 1 はじめに

夢野久作は、「キチガイ地獄」〔改造〕一九三二年一月）、「地獄の花」〔ぷろふいる〕一九三四年四月）、短編小説集『少女地獄』（黒白書房、一九三六年）など、タイトルに「地獄」がつく作品を数多く発表している。このことに關して鎌田東二は「夢野久作・地獄の季節」〔ユリイカ〕一九八八年一月）において、

『押絵の奇蹟』でも『ドグラ・マグラ』でも、夢野久作はくりかえし兄妹の甘美でせつない地獄を描き出す。兄妹地獄の構造を執拗に探偵する。夢野久作は「探偵小説の真使命」と題するエッセイのなかで、「肉体を切り開き、臟腑を引き出し、骸骨を漂白し、血液から糞尿まで分析して、その怪奇、美醜、悪美に戦慄しようとする処にこの探偵小説の使命が生まれた」とのべている。まさに、夢野久作が試みようとしているのは、こうした意味での「探偵Ⅱ犯罪Ⅱ科学」であるよ

うなパラドキシカルな行為なのだ。

と指摘し、夢野久作を「地獄を呼び出す業に長けた冥探偵」とよんでいる。押野武志も「瓶詰の地獄」〔近代小説（異界）を読む〕初秋、双文社・一九九九年三月）において、「夢野久作は地獄が好きである。語るⅡ騙ることの過剰性と狂気を描いた「キチガイ地獄」〔改造〕昭7・11）、少女たちが自殺に至る悲劇を描いた連作『少女地獄』（黒白書房、昭11・3）など、地獄をタイトルに用いた作品が他にもある。さらに、久作が一番最初に読んだ探偵小説は、黒岩涙香の「活地獄」であったという（涙香・ポー・それから）」と指摘している。夢野久作における「地獄」のモチーフは、他の諸作品とも連動しながらこの作家の際立った特徴を照らしだしているのである。

また、「地獄」を幻視し続けたこの作家が、小説のなかで頻繁に採用した文体は書簡体形式であった。幼少期を振り返った隨筆に「子供の時に、自分の家へ郵便が投げ込まれるのを遠くから見飛んで帰つた事がある。別に手紙が見たいわけではなかつたけ

ど、何処から来た手紙か知り度かつたからである。町中の家々に来る手紙をみんな知つてゐる郵便屋さんが羨ましくて仕様がなかつたものである。あんなのが探偵趣味といふものであらうか」(「ナンセンス」、「猟奇」一九二九年八月)と記すほど手紙に偏執的な興味をもち、のちに妻の実家を継ぐかたちで福岡市黒門郵便局長に就く(一九三〇年五月)ことになる夢野久作は、書簡の形式を用いて読者の想像力を刺激することを好んだ作家であつた。

本稿が論じようとする「瓶詰地獄」(「猟奇」一九二八年一〇月号に「瓶詰の地獄」として発表)は、「地獄」と書簡体という、夢野久作が最も好んだモチーフ、形式を用いて構成された短編小説である。それゆえか、この作品が単行本に収録されるたびに改稿を繰り返して、『日本探偵小説全集 第十一篇 夢野久作』(改造社、一九二九年)に収録された際にルビが大幅に打ち直されている。(夢野自身によるものか、編集担当者によるものなのかは不詳)『日本小説文庫』(春陽堂、一九三三年)に収録するにあつては、再び改稿を加えたうえで題名を「瓶詰地獄」に変更している。彼は長きにわたつてこの作品を大切に、繰り返し手を入れ、慈しんだのである。

「瓶詰地獄」は、ある島に届いた三本の漂着瓶それぞれに入つた手紙と、その漂着物の存在を伝える役場の公文書によつて構成されている。発信者がそれをどのような目的で書いたかは分からないため、テキストでは便宜的に、「◇第一の瓶の内容」、「◇第二の瓶の内容」、「◇第三の瓶の内容」と名付けられている。厳密に言えば、それを手紙と名付けているのは私たち読者であつて、

発信者は日記や懺悔録のようなものとしてしたためていたかもしれないのである(本稿では、そうした含みを認識したうえで敢えて「手紙」という呼び方も用いている)。

瓶の差出人は無人島に漂流した兄妹からのものであり、それらは漂着順に「◇第一の瓶の内容」、「◇第二の瓶の内容」、「◇第三の瓶の内容」と並べられている(以下①、②、③と表記する)。

①は、二人からの遺書のようなものであるが、署名は「神様からも人間からも救われ得ぬ 哀しき二人より」となっており、自殺の理由はもちろん、誰が執筆したのかも曖昧になっている。②は「太郎」と名のる署名者によつて記されており、二人が無人島に漂着したあと、その島でどのように暮らしてきたのか、その過程で自分の精神状態がどのように変化してきたのが詳細に記されている。

③は、自分たちの生存を伝える文面がカタカナ数行にまとめられており、これらの手紙を通して二人が兄妹であることが判明する。つまり、瓶が漂着した順番と手紙が書かれた順番は必ずしも対応しておらず、はじめから読者の推理を促すような仕組みになっているのである。

生前の夢野久作と交流のあつた大下宇陀児が「美しい久作の夢——「瓶詰地獄」解説」(「寶石」一九五四年四月)のなかで、

私は、『猟奇』ではこの作品があつたのに気がつかず、翌昭和四年の春、改造社で出版した『日本探偵小説全集』のうちの『夢野久作集』で、はじめて読んだのだが、その時真に舌を巻いたものである。そしてそのうち、二度も三度も読みかえしているし、今も実はこの文を書くために読みかえして、

驚きを新たにしているのだ。／形式からいうと、これはスリラーだろう。そのスリラー中に一種のトリックがあるが、作品の構成そのものがトリックになっている。／第一の瓶、第二の瓶、第三の瓶が、逆に第三の瓶から読者の目の前に現われることにより、エフェクトが一〇〇パーセント高められたのであった。久作が、この着想を掴んだ時に、胸の奥からどんな喜びや昂奮が湧いたことか、それを私は目で見るように推察することができる。欣喜雀躍であったにちがいない。彼は喜びをおさえて筆を走らせた。そしてこんなにもすばらしく、またこんなにも短い小説をこしらえた（中略）言葉による情景を、頭脳の網膜に映しかえると、テクニカラー映画画面となって再現される気がする。海の青さ、雲の輝き、鳥や花や草や、そして愛欲と神の怒りに苦しむ裸体の男女、それらが目まぐるしく交錯する画面になってくるものである。

と絶賛しているように、この作品の「着想」は、同業の探偵小説作家ですら「胸の奥からどんな喜びや昂奮が湧いたことか」と羨望するほど魅力的なものだったといえる。もちろん、一方には、「夢野久作の作品故に欲を言うなら、ここではストーリー・テラーとしての才能を示すにとどまっている。キリスト教と近親相姦の問題を扱いながら、深刻な主題が着想の面白さに食われているのだ。手法のために近親相姦の阿修羅を書けないまま終わっているのである」（『日常性に対する刺激』、『夢野久作全集2』『月報』三一書房、一九六九年七月）とする結城昌治のような立場もあるが、大下宇陀児の賛辞は概ね多くの読者にも共有され、研究史の

うえでも、まずは「着想」の素晴らしさを評価する声が多い。「瓶詰地獄」は、「押絵の奇跡」（『新青年』一九二九年一月）や『ドグラ・マグラ』（松柏館書店、一九三五年）などと同様、兄妹の恋を扱っており、他の諸作品とのあいだにモチーフの類似性を認める研究がなされているが、まずは、そうした作家論的なアプローチとは別に、「着想」そのものの秀逸さにおいて高く評価されてきたことを確認しておこう。<sup>1)</sup>

ただし、その驚くべき「着想」を短編小説のなかで具現化するうえで、作者はかなり強引な手法も用いている。許光俊が『邪悪な文学誌 監禁・恐怖・エロスの遊戯』（青弓社・一九九七年）で「夢野が言う脳髓とは、監禁の別名であって、出口がないガラス瓶の中でもがき、沸騰していくのだが、その際、妄想は妄想なりに自分のルールを作り、自分を統制し、自分を一種の論理の網の目で包み込まねば気がすまない。いわば、主体としての人間は妄想をコントロールできないが、妄想は自らを管理する能力を備えている」とし、「瓶詰地獄」などの諸作品は信頼できない語り手によって反逆的、破壊的に生産された「ステキな妄想」なのであると述べたように、この作品を現実という視点から見ると、様々な局面で「空転」を強いられるのである。<sup>2)</sup>

また、最新の研究のひとつである伊藤里和「漂流するユートピア——『瓶詰地獄』論——」（『日本女子大学大学院文学研究科紀要』二〇〇七年三月）が、「瓶詰地獄」の方法を特徴づけているのは、形式や内容上の決定不可能性である。これは物語の絶対的根拠を否定する不確定要素を含むことによって、作者の意志を相対化し、選択の余地を読み手に与える方法である、「手紙の配列

がどういふ規則性に基づくものなのかは不明であり、読み手はそれぞれの手紙に書かれた内容を手がかりに物語を再構成しなくてはならない。しかしそこには絶対的な解答が用意されていないために、複数の物語の可能性／不可能性が生じることになる」と指摘したように、矛盾や疑問点に由来する「決定不可能性」を肯定的に捉え、読み手自身が物語を再構成していくような作品として評価する見方もある。作者・夢野久作自身、初出以降、何度も細かい改稿を施し、全集等に収録したにもかかわらず、内容の骨子には修正を施さなかった事実を考慮すると、いつけん矛盾しているようにみえることや謎を喚起するところにこそ夢野久作の狙いがあったとする読み方には一定の説得力があるように思う。

そこで、本稿では、まず作品内に存在する謎をひとつひとつ取りあげ、その謎を構成するうえで作者がどのような表現・技法を駆使しているかを明らかにする。また、作品内の記述からその謎を解くための手がかりを探し、特に作品に登場する聖書の役割という観点から分析を試みる。

## 2 手紙の配列をめぐって

「瓶詰地獄」を読み解くうえで、まず立ちはだかるのが、作品内における手紙の配列の問題である。手紙の入った三本の瓶は「××島」に漂流し、同時に発見されアトランダムに開封されている。作品内における①から③の手紙は、たまたま開封者がある順番に開封したからそう名付けられただけである。これまでの先行研究では、二三通の手紙は、直線的な時間の経過とは逆に配列

されている。だからあたかも兄妹が次第に幼稚化・退行していくかのような印象を与える（押野武志「瓶詰の地獄」前出）といった具合に、この手紙の配列は逆転しており、手紙の書かれた時系列を③↓②↓①と解釈する場合が多かった。しかし、この配列だと②に書かれたある内容に矛盾が生じる。まずは、この点について、それぞれの手紙から得られる情報をあらかじめ整理してみよう。

①には「お父さまや、お母さまはきつと、私たちが一番はじめに出した、ビール瓶の手紙を御覧になって、助けに来て下さったに違いありません」という記述がある。このことから、①以前に出した手紙が存在していることが明らかになる。②は、③よりも語彙量や文章表現力が格段に向上していることから、書き手の成長Ⅱ年度の経過が推測できる。③が、「太郎」という署名の表記以外、ほとんど平仮名とカタカナで書かれているのに対し、②では聖書から学んだと推測できる漢字や慣用句が使われている。②にある「私たちは、それから、お父様とお母様にお手紙を書いて大切なビール瓶の中の一本に入れて、シツカリと樹脂で封じて、二人で何遍も何遍も接吻くちゅをしてから海の中に投げ込みました」という記述から、②を書く前に別の手紙を流していたことが明らかである。また、③は自身らの安否を簡単な言葉で伝える非常に短い手紙となっている。③は①、②と違い、それ以前に手紙を出した形跡が認められない。——もちろん、それ以外にも、①から③以外の手紙が存在していた可能性、手紙の書き手が何らかの理由で嘘の記述をしたり、わざと幼稚にふるまったりしている可能性なども考えられるが、本稿は、作品内で提示されている情報のみ

を対象として最も理にかなった解釈をすることを念頭に置いてるので、そうした欠落や空白を読み込むことはしない。

これらの手紙の記述内容をもとに、従来の研究では③↓②↓①の順番で手紙が書かれたと推理されてきたわけだが、さきにも述べたように、この配列には重大な問題がある。それは手紙の署名者が報告する「鉛筆の分量」である。

②の後半部分には「鉛筆が無くなりかけていますから、もうあまり長く書かれませんか」という一文がある。このとき書き手は、もうあまり長く書くことができないだろう、という焦燥と闘いながら言葉を連ねているのである。①が②のあとに書かれたものと解釈すると、文字数が一二三字もあり、無くなりかけた鉛筆で書くには多すぎる分量になっているのだ。このことから、③↓②↓①の順番で書かれたとする解釈は成立しにくくなる。

では、手紙が書かれた順番としては他にどのような可能性があるだろうか？　そこで、すべての組み合わせのなから、わずかも可能性があると思われるパターンひとつとつを検証してみたい。まず注目したいのは、③が最後に書かれた可能性があるかどうかである。③の署名は「市川太郎イチカワアヤコ」となっており、漢字とカタカナで別々に表記されている。もしこの手紙が最後だとすると、鉛筆の残量はほとんどなかったと考えられるが、わざわざ二人が別々に苗字を書いていた、画数の多い漢字を用いていたといった点が不可解である。また、最後までした場合、①↓②↓③だと、さきに述べた「前の手紙」問題が生じるため内容の辻褄が合わなくなるし、②↓①↓③だと退行化の過程としては辻褄が合うものの、やはり、鉛筆の問題、「前の手紙」の問題

が残る。

次に③↓①↓②の読み方はどうだろうか？　状況的には最も整合性があるようにみえるが、それでは「救いの舟」が現れたあと「悪魔の誘惑」に負けそうになってしまふことになり、内容的には破綻してしまふ。①↓③↓②だと「前の手紙」の問題も解決できないし、内容の辻褄も合わない。②↓③↓①の順は鉛筆の問題、「前の手紙」の問題はもちろん、内容の辻褄も合わない。つまり、それぞれの手紙を単独で考えている限りでは、どのパターンにも克服できない矛盾が生じるのである。

そこで考えられるのが、②を途中まで書いたあと、それを瓶に詰めて流す前に①を書き、さらに①のあとで②を加筆した可能性、すなわち、③↓②↓①↓②という順序である。この展開であれば、鉛筆の残量の問題、「前の手紙」の問題、そして、内容の辻褄に関する問題がクリアできる。また、作品内にはこのような推理を促す根拠が二つ存在している。一つが、②の序盤ではカタカナで書かれていた「ゴクラクチョウ」という表記が途中から「極楽鳥」という漢字に変る点である。手紙の途中にタイムラグがあり、その間に書き手が成長して漢字表記ができるようになったのではないかと推測できる。もう一つが、②は「\*」という記号によって章が区切られている点である。この手紙は明確な意思のもとで各章が分けられており、それぞれの章ごとにエピソードがまとめられているのだ。

しかし、③↓②↓①↓②の順で書かれたとすると、②のどの部分で区切りをつけ、①を挿入したのだろうか。この問題はそれほど易しいものではない。文のどこで区切っても、内容の上での

矛盾やしらがらみが生じてしまうのだ。また、「\*」についても、それが内容としての括りなのか書かれた時期の違いなのかを明確にすることはできない。これらのことから、①から③までを完全な時系列に並べ直すことは不可能なのだとわかる。

このようにして、「瓶詰地獄」の世界は様々な次元での謎と矛盾の錯綜によって読者を困惑させるわけだが、その一方で、このテキストには、なぜそれを明示する必要があるのかという疑問を抱かせるような箇所もある。その第一は聖書に関する記述である。二人は聖書のことを「神様とも、お父様とも、お母様とも、先生とも思っ」た。なによりも大切に扱っている。この聖書については手紙のなかで、「その時に、私たちが持っていたものは、一本のエンピツと、ナイフと、一冊のノートブックと、一個のムシメガネと、水を入れた三本のビール瓶と、小さな新約聖書が一冊と……それだけで」と明言されている。この問題に言及した中条省平が、「彼らが離れ小島に持ってくるものは、「新約聖書」でなければならなかった」（「文豪に学ぶテクニク講座」・小説トリッパー「一九九七年夏季号」と言明したうえで、「本来無垢無邪気であった人間が性の誘惑ゆえに決定的な罪を犯すというこの物語は、アダムとイブの物語の反復」であり「太郎とアヤ子が生きたのは、人類の原罪の物語の最も強烈な再現だった」と論じたように、この問題に関しては、作品内で「新約聖書」と記述されていることに対してほとんど異論が出されてこなかった。

だが、そこに根本的な疑義を提示したのが鈴木鷹理（「学部生レポート」『瓶詰地獄』と聖書）（語文「二〇〇八年六月」）である。鈴木は、手紙に用いられている「禽鳥」、「倉皇」という漢字

が旧約聖書にしか登場しないものであり、もし二人が見た聖書が新約聖書だとすれば「鳥」、「禽」という漢字が使われていたはずだと指摘したうえで、

『瓶詰地獄』において使われている漢字は新約聖書だけのものではない。（中略）近親相姦は新約聖書では禁止されていない。太郎はどのように漢字を知り、なぜ近親相姦を罪だと認識したのだろうか。そして、「詩篇」も新約聖書ではありえない。したがって、太郎たちが見ていた聖書、つまり、夢野久作が『瓶詰地獄』を執筆するうえで参考とした、あるいはモデルとなった聖書は新約聖書ではなく、新約聖書と旧約聖書のどちらもが含まれている旧新約全書であったと考える。

と結論づけている。つまり、作品の表記では「新約聖書」と書かれているが、作者・夢野久作が参考にしたのは旧約聖書であり、太郎は、旧約聖書のなかでしか「罪」として規定されていない「近親相姦」の問題を知ったからこそ深く思い悩むことになるというわけである。だが、ここにひとつの謎が浮かび上がる。さきにも述べたように「瓶詰地獄」は綿密な計算のもとで構想された作品であり、幾度も校訂が施されている。にもかかわらず、なぜ作者・夢野久作はわざわざ作品内に「新約聖書」という言葉を残したのであるのかという疑問がそれである<sup>3</sup>。

新約聖書と旧約聖書では「罰」とされる条項が大きく違っている。聖書を「神様とも、お父様とも、お母様とも、先生とも思っ

て」成長した二人にとって、その違いは決定的な意味をもつはずである。本文にはその問題が、「私たちは、こうして私たちの肉体と靈魂を罰せねば、犯した罪の報償が出来ないのです。この離れ島の中で、私たち二人が犯した、それはそれは恐ろしい悖戻の報責なのです。」「二人は互いに、こうした二人の心をハッキリと知り合っていないながら、神様の責罰を恐れて、口に出し得ずに居るのでした。」「私が生きておりますのはアヤ子のためにこの上も無い罪悪です。」などと記されており、二人が重大な「罪」を犯した（あるいは、犯そうとしている）ことが明らかになっている。特に前者の表現からは、二人が近親相姦を犯したことが想起され、先行研究においても例外なくそのように理解されてきた。

しかし、近親相姦を「罪」として明記しているのは旧約聖書のみである。旧約聖書のレビ記にある「肉親の女性に近づいてこれを犯してはならない。わたしは主である。（中略）姉妹は異父姉妹、異母姉妹、同じ家で育ったか他の家で育ったかを問わず、彼女たちを犯して、辱めてはならない。（レビ記 18:6、9）」という記述こそ、その明確な根拠なのである。逆にいえば、一般社会から隔絶された世界で成長した二人が、倫理観を育んでいく過程において唯一の拠り所とした一冊の聖書がもし新約聖書だったとしたら、二人が近親相姦という「罪」の意識に囚われることはなかったはずなのである。

ここで発想を転換して、二人が「罪」の意識に苛まれることになった理由として近親相姦以外にどのような要素が考えられるかを新約聖書から探ってみよう。新約聖書において最も重要視されるのはマリアの処女性である。新約聖書ルカにおいて「そのおと

めの名はマリアといった。（中略）天使は言った。「マリア、恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた。あなたは身をもって男の子を産む（中略）マリアは天使に言った。「どうして、そのようなことがありえましょうか。わたしは男の人を知りませんのに。」天使は答えた。「精霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包む。だから、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれる。……」（ルカ1:27-35）」とあるように、マリアが「おとめ」であるにも関わらず妊娠したことが重要視されている。新約聖書において、子を産むことは原罪の繰り返しであり、累犯の「罪」なのである。処女である女は、その「罪」を犯すことのない存在でなければならないのである。——以上のように、新約聖書では、処女の貴さ・清らかさが強調されている。処女はいつまでもそのままであり続ける方がよいという教えが説かれている。

こうした処女性や貞操観念の問題は、作者・夢野久作が「瓶詰地獄」の構想を練っていた時期の日記からも類推できる。そのなかで、男女の貞操観念について考えをめぐらした夢野久作は、「七月九日 月曜 香椎にかへる。室中カビくさく、雨ジメくふる。ラジオオラス、立ちあふひ咲く。「獵奇」より注文来る。約束す。／東京に精神文化研究所立つと、個人の思ひ立ち也。喜ばし。然れども其研究方針を見るに漫然たるものあり。唯来るべき新時代の魁となるべきを頼み、思ふのみ。吾思ふ。現代文化が要求せる最新鋭なるものは旧精神文化の破壊これなり。新物質文明の確立也。その槍玉に上るもの曰く、宗教（阿片也とて）義理、忠孝道。即ち父子主従道、男女貞操等。尚ぶのは純真なる精神発露（彼らは之を本能、感性、其他の欲と誤解し邪道とも雖も之を偏執すれ

ば尊重す)也。而して時々刻々猫眼的に変化する心理を時々刻々にそのまま尊重する一種の利那主義と化し又は新奇を求むるために悪魔主義、耽美思考等の流行さす」と記している。また、この翌日以降の日記には、「七月十日 火曜日 風邪臥床 「瓶詰の地獄」案成る。／七月十一日 水曜 瓶詰地ゴク、草稿。風邪なほる。夕方、電光烈しく、遠雷。／七月十二日 木曜 瓶詰め地ゴク、清書。引つゞき、雨ふる。遠雷。／七月十七日 火曜 終日、瓶詰地獄をかく。雨、沛然として降り、蒸し暑し。気持よく午睡。パンと玉ネギ」(杉山龍丸『夢野久作の日記』葦書房、一九七六年)とあり、男女の貞操観念に関する考えがまとまった段階で、一気に「瓶詰地獄」の筆を進めたことが分かる。当時の夢野久作にとっては、「旧精神文化」を破壊し、「純真なる精神発露」を求めつつ、それが「悪魔主義」や「耽美思考」に陥らないためにはどうしたらよいか、という問いがあり、それぞれの微妙なバランスを保ちながら「新時代」の到来にふさわしい表現を模索することが喫緊の課題となっていたのである。

処女崇拜の問題は「瓶詰地獄」の本文でも、「どうぞ、あの処女を罰しないで下さい。そうして、いつまでもいつまでも清浄きよけがにお守り下さいませ。」「夕日を受けて血のように輝いている処女の背中の神々かみかみしさ……。」と表現され、アヤ子にその役割が仮託されている。また、「処女」という表記にわざわざ「おとめ」というルビが付されていることにも注目したい。改訂を重ねることにルビが増えていったこの作品だが、処女という表記には、初出の段階で「おとめ」というルビが付されている。このことから、②の書き手は単に聖書の文字を書き写したのではなく、その言葉が意

味するもの／意味されるものの二重性をしっかりと認識したうえでこの言葉を用いていたと言える。

また、新約聖書では処女を尊ぶと同時に、姦淫や肉体や靈魂の欲望を抱くことを罪としている。

みだらなことやいろいろの汚れたこと、あるいは貪欲なことを口にしてはなりません。卑しい言葉や愚かな話、下品な冗談もふさわしいものではありません。それよりも、感謝を表しなさい。すべてみだらな者、汚れた者、また貪欲なもの、つまり、偶像礼拝者は、キリストと神の国を受け継ぐことはできません。(エフェソ4:3-5)

「あなたがたも聞いているとおり、『姦淫するな』と命じられている。しかし、私は言っておく。みだらな思いで他人の妻を見るものはだれでも、既に心の中でその女を犯したのである」(マタイ 5:27-28)

とあるように、新約聖書では淫らな行為はもちろん、それを「心の中」で想像しただけでも姦淫の「罪」になるとされている。つまり、「瓶詰地獄」において太郎が自らを責める「罪」の意識としては、近親相姦だけでなく、尊ぶべき処女であるアヤ子に対して淫らな妄想をしてしまったことへの贖罪が含まれていると考えられることもできるのである。

もういちど整理しよう。もし太郎が持っていた聖書が新約聖書だとしたら、太郎が感じた「罪」は処女であるアヤ子に性的妄想



を抱き、彼女を穢そうとしたことである。旧新約聖書の場合は、それに近親相姦の「罪」が加わる。二人が所持していた聖書が旧約・新旧約どちらであろうとその行為を「罪」としていることに変わりはないが、「罪」の質、すなわち太郎のなかに芽生える贖罪意識の内実は違ったものになるはずなのである。

「瓶詰地獄」と聖書の関係をめぐっては、もうひとつ重大な問題が横たわっている。それは自殺をほのめかす記述についてである。①の手紙に、「私たち二人は、今から、あの大きな船の真正面に在る高い崖の上に登って、お父様や、お母様や、救いに来て下さる水夫さん達によく見えるように、シッカリと抱き合ったまま、深い淵の中に身を投げて死にます。」とあるように、「罪」の意識に苛まれた二人は崖から飛び降りて投身自殺しようとしているように読める。だが、②において、書き手である太郎は、

——思はずヨロ／＼とよるめいて、漂ひ砕くる波の泡のなかに落ち込みさうになりましたが、やつとの思ひで崖の端に踏み止まりました。」という、身に危険が及ぶと自らの意志で死を回避している太郎の姿がある。彼は「さうしてゐるアヤ子の決心がわかりますと、私はハツとして飛び上がりました。夢中になって駆け出して、貝殻ばかりの岩の上を、傷だらけになつて泣きながら、岬の大磐の上に這ひ上りました。キチガビのやうに暴れ狂ひ、哭き喚ぶアヤ子を、両腕にシッカリと抱き抱へて、身体中血だらけになつて、やつとの思ひで、小舎の処へ帰つて来ました。

と描写し、「キチガイのように暴れ狂い、哭き喚ぶアヤ子」を「シッカリと抱き抱えて」自殺を阻止したことを明らかにしている。

これらの言説を読むかぎり、太郎は彼自身の自殺願望に苛まれているわけではなく、むしろ自殺しようとするアヤ子を監視する役割、すなわち、自殺願望そのものに抗う存在であることがわかる。彼自身は、こうした自己の生存本能に気付いていないらしく、自分分は「遺されるアヤ子」を思つて自殺を踏みとどまつたと考えているし、死そのものについても、自らの意思でどうこうなるものではなく、神の裁きによるもの、と捉えている。しかし、彼の本能は無条件で生き延びることを選択しており、「死」はいまの苦しい状況から逃れるための精神的拠り所に過ぎない。聖書を通して神への信仰を持ち続けている限り、彼が自殺という手段をとることはできないのだ。

### 3 太郎とアヤ子における〈外部〉

再び手紙の記述にもどろう。これまで特に注目してきた②の手紙には「太郎記す」という署名があり、この手紙全体が太郎の認識に基づいて書かれていることが明らかにされている。だが、②は①と違って手紙の宛先が書かれていない。また、文中の「ああ神様よ……」という表記から、神様に宛てて書かれたものとみなすこともできる。神に対する懺悔であるならば、それは心のなかの内言として行えばよいのであって、わざわざ文字に託す必要はない。にもかかわらず、懺悔を文字化しようとした太郎のなか

にはどのような認識が芽えていたのであるか。ここで考えなければならぬのは、作品のなかで太郎が聖書を燃やしていることである。太郎は「神様とも、お父様とも、お母様とも、先生とも思つて」きた聖書を目の前から消滅させることで、聖書に拘束された世界の「外部」を求めはじめるのである。

この問題は、なぜ無人島の「内部」で二人だけの世界を享受していた二人が、手紙を瓶に詰めて流そうとしたのかという点とも絡み合いながら、あらためて作品の枠組みを検討するきっかけを与えてくれる。そもそも、手紙を入れた瓶を流すのは「外部」との接触を図つてのことである。太郎の中には、何らかの方法で自分たちの存在を「外部」に知らせたいという思いがあつたのである。

だが、この物語における内と外の関係は、果して、「無人島」で暮らす二人の世界Ⅱ「内部」／二人が瓶詰の手紙を届けたいと願う世界Ⅱ「外部」といった単純な二項対立の図式になつていたのであるか。太郎とアヤ子は、たしかに「外部」から完全に隔離された「無人島」に暮らしているが、二人のなかには常に、「救ひの舟」が来て島の外に連れ出されたら、自分たちの「罪」が露呈してしまうのではないか、という恐怖感がある。それは見たことも聞いたこともない世界であり、ひよつとしたら神の裁きよりも恐ろしいものだったかもしれない。つまり、二人はすでに観念としての「外部」に怯え、その視線やモラルがいつ自分たちを裁きにやってくるかもしれないという漠然とした恐怖感に囚われているのである。

また、二人が絶対的な規範としてきた聖書、および、そこに書

かれていた世界のありようもまた、本来的には、彼らの内面に対応するもうひとつの「外部」である。だが、聖書を唯一の規範として生きてきた彼らはそのような認識をもつこともないまま、「内部」と「外部」が癒着した世界に生きていた。そして、聖書を燃やした瞬間、聖書そのものが自分たちを縛る「外部」であつたことをはつきりと知らされる。これら二つの規範は、いわば観念上の「外部」として彼らの「罪」意識を拘束しているのである。

作品には、それとは別の次元でもうひとつ「外の世界」Ⅱ現実としての「外部」が存在している。①②③の瓶を回収した「××島村役場」とその瓶が送られた「潮流研究所」、および、そこで交わされた「公文書」が規定する世界である。ここで描かれる「潮流研究所」の調査について、田畑暁男は『メディア・シンδροームと夢野久作の世界』NTT出版、二〇〇五年）において、

瓶に手紙を入れて漂流させること自体は、別に架空の事柄ではない。例えば、海流の流れを調査するための、中に返信ハガキを入れた「海流ビン」。拾つた人にハガキを出してもらうわけだ。日本で初の調査は明治二十六（一八九三）年、択捉島と色丹島の間から四百本の海流ビンを流し、五十六本が回収された。日本で郵便事業が開始されたのは明治四（一八七一）年だから、既に二十年以上経って一般にも浸透していたからこそ、こうした事業が成り立ったのであろう。その後も様々な場所でも調査が行われたが、最も大がかりなのは、昭和三十五（一九六〇）年に鹿児島県海上保安部が行つたもので、九州南西海域から約二万本の海流ビンが流さ

れ、うち千二百五十五本が回収された。

と指摘している。この二人にとつての「外の世界」とは、彼らの中の想像にすぎないものであり、実際の「外の世界」は彼らの想像するそれよりもはるか広大なものである。この実際の外部とはどのようなものであろうか。「瓶詰地獄」は三つの手紙と、「××島村役場」が潮流の調査を進めている「海洋研究所」に送った公文書によって構成される。この太郎とアヤ子が書いた三つの手紙以外の手紙の存在は、二人が考える外の世界を更に内包する世界があることを暗示している。これは、二人が考えている外の世界よりもずっと大きな枠組みの世界であり、またそこでは兄妹が思っている程、彼らの罪には注目していない。この世界とは、「××島村役場」や、「海洋研究所」が存在している世界であり、彼らが流したビール瓶の手紙は、海流調査のサンプルとして扱われることになる。

この問題について、小金沢透は「夢野久作「瓶詰地獄」論——〈ずれ〉るコミュニケーション、その配列——」「中央大学国文」二〇一〇年三月)において、「救いの船」とは「二人の中で育てられた外部への空想(内部内外部の社会)」の視線であると述べている。そして「瓶詰地獄」にもう一つ外部の存在を見出し、「兄妹相姦は空想の外部社会の強大な拘束力により罰せられるが、実際の外部社会ではサンプリングの一つと成り下がるのだ。ここには自己の罪を過分に恐れる一方と、それに対して実は何らの興味も持たない一方という図式がある」と指摘している。同論が指摘するように、「瓶詰地獄」には、「実際の外部社会」すなわち手紙

に①、②、③と順序を付け、少なくともこの順序で開封したと思われる「誰か」の存在が暗示されている。また、「月 日 ××島村役場④」と、公的文章にも関わらず日時と場所がないことは不自然であり、この部分を消去した「誰か」の存在も感じられる。しかし、この「誰か」は全く特定できず、文章の中にも存在しない。

だが、見えない「誰か」の視線は小説内に確かに存在しており、その「誰か」は二人の知らない外の世界に属する人物である。「実際の外部社会」も、テキストのなかに書き込まれた現実であり、読者がいる場所ではない。つまり、この物語は太郎とアヤ子が暮らした無人島の世界(ただし、①〜③の手紙からしかこの世界の出来事を知ることとはできない)↓①〜③の手紙において語られる現実↓それを受信した「××島村役場」や「海洋研究所」が公文書として取りまとめた世界という三層構造になっており、読者は時間的な順序や因果関係がバラバラに解体された情報を平面的に受け取ることを強いられるのである。比喩的な言い方をすれば、読者はまさに瓶の中に詰められた世界をガラス越しに見ることしかできないのである。

#### 4 旧約聖書におけるアダムとイブのモチーフと「罪」の観念

先行研究でも数多く言及されているように、太郎とアヤ子の状況や二人が生活を営んだ環境は、旧約聖書創世記のアダムとイブ(エバ)がモチーフとなっている。創世記に、主なる神は、東の方のエデンに園を設け、エデンから一つの川が流れ出ていた。園

を潤したとある。太郎とアヤ子も「島の東に在る岬と磐の間から  
キレイな泉が潮の引いた時だけ湧いてゐるのを見付けましたから、その近くの砂浜の間に、壊れたボートで小舎を作つて、柔  
かい枯れ草を集めて、アヤ子と二人で寝られるようにしたとい  
う。この無人島はエデンであり、ボートの小舎はエデンの園を暗  
示していると考えられる。世界に二人きりの男と女という点でも  
同じである。アダムとイブの禁断の果実を食べたというのは、神  
の言葉や教えに背いた罪である。太郎とアヤ子にとっては、神で  
あり先生でもあつた聖書を焼くことが罪としてなざられている。  
アダムとイブは神に背いた罰として、エデンの園を追放され、エ  
デンに暮らすこととなる。これが、所謂樂園追放である。太郎と  
アヤ子は聖書を燃やしたことにより、同時に、小舎を失つてしま  
う。これが二人にとっての樂園追放であり、無人島（での生活）  
は天国から地獄のように変化してしまう。江頭も先行研究で「夢  
野久作はこの作品になぜキリスト教を持たんだのか。インセスト  
とキリスト教的タブーが夢野久作においてもつ意義は何なのか。  
それを犯せば強く絶対的な罪となり罰せられる、というその構造  
はこの作品にも強く現れている。（中略）失樂園、樂園追放がこ  
こでは樂園に居ながら近親相姦の（性）によつて地獄に変わる、  
という「聖書」のドラマがどうしてもこの作品にとつて要請され  
ねばならなかつたからである」と語っている。太郎とアヤ子には  
アダムとイブがあてはめられ、原罪を犯した結果樂園追放される  
というモチーフが、彼らが暮らす無人島が次第に天国から地獄へ  
と変化していく様子に深みを与えている。聖書というアイテムは、  
作中の二人にとっての社会規範として用いられると同時に、二人

の状況を端的かつ効果的に読者に伝えることができるモチーフと  
しても機能しているのである。

創世記ではイブはアダムから造られたものであつた。彼らとは  
とも一つのものであつたが、それが別の二つのもの、すなわち  
男と女となるのである。この小説でアダムとイブがモチーフとさ  
れ、太郎とアヤ子にあてはめられている。この、男女の別離や一  
つのものが別のものになるといった点は反映されていないのだら  
うか。段階を踏まえて考察する。

①と②からは、二人の現況や書き手の感情といった内容はもと  
より、宛名などからも数多くの情報が読み取れる。②の手紙は文  
末に「太郎記す」とあることから、手記者は太郎であることが確  
定される。③の手紙には二人の署名が明記されている。しかし、  
①は「悲しき二人より」と記述があるだけで、書き手の特定がで  
きない。②を太郎が書いた事を前提に、①を誰が書いたのかを探つ  
ていく。

①と②の手紙では、恐れている対象が違つている。②では「そ  
れは、おおかた、私が聖書を焼いた罰なのでしょう。夜になると  
星の光りや、虫の声や、風の葉ずれや、木の実の落ちる音が、一  
ツ一ツに聖書の言葉を叫びながら、私たち二人を取り巻いて、  
一歩一歩と近づいて来るように思われるのでした。」「これだけの  
虐待と迫害に会ひながら、なおも神様の禁責を恐れている」と聖  
書（神）の恐れから逃れることができないことに恐怖している。

これに対し①では「ああ……この離れ島に、救いの舟がとうと  
う来ました。（中略）大きな船から真白い煙が出て、今助けに行  
くぞ……というように、高い高い笛の音が聞こえて来ました。（中

略)けれども、それは、私たち二人にとって、最後の審判の日の  
獄よりも怖ろしい響で御座いました。私たちの前で天と地が裂け  
て、神様のお眼の光りと、地獄の火焰が一時に閃めき出たように  
思われました。(①)と、外の世界との接触(舟が迎えにきて、  
帰ること)が最も恐ろしいと書いているのだ。また、二つの手紙  
は罪の懺悔の対象も異なっている。

②では「ああ。隠微たるに鑒たまう神様よ。」と神に対し懺悔  
しているのに、①では「ああ。お父様。お母様。すみません。す  
みません、すみません、すみません。(中略)又、せっかく、遠  
い故郷から、私たち二人を、わざわざ助けに来て下さった皆様の  
御親切に対しても、こんなことをする私たち二人はホントにホン  
トに済みません。どうぞどうぞお赦し下さい。」と父母や「皆々  
様」、つまり外の世界の人たちに向かって罪を謝罪しているのだ。

死についての観念も違っていることが読み取れる。三章でも少  
し触れたが、「もし私の死にたい、お願いが聖意にありません。少  
らば、只今すぐに私の生命を、燃ゆる閃電にお付し下さいませ。  
(中略)神様。神様。あなたはなぜ私たち二人を、一思いに屠殺  
して下さらないのですか」と神に裁かれることを望んでいる。①

では「私たち二人は、今から、あの大きな船の真正面に在る高い  
崖の上に登って、お父様や、お母様や、救いに来て下さる水夫さ  
ん達によく見えるように、シッカリと抱き合ったまま、深い淵の  
中に身を投げて死にます。そうしたら、いつも、あそこに泳いで  
いるフカが、間もなく、私たちを喰べてしまつてくれるでしょう。

(中略)私たち二人は、フカの餌食になる値打しか無い、狂妄だつ  
たのですから」と自殺(フカに食べられること)を望んでいる。

このことから二つの手紙は、同じ聖書でも、違う箇所に着き  
おいていることが推測できる。②は神へ許しと裁きを請い、懺悔  
すれば許されるという教えを重視している。しかし、①はヘブラ  
イにある「ほとんどすべてのものが、律法に従って血で清められ  
ており、血を流すことなしに罪の赦しはありえないのです。」と  
いう「罪は血をもつてつぐなう」教えを重視しているのだ。これ  
らのことから①と②の聖書解読の差異が読み取れる。

②では二人は聖書を燃やすことで物質的社会規範を消滅させ、  
近親相姦に至つたように読めるが、②の最後に「せめて二人の  
肉体だけでも清浄でおりますうちに」という一文がある。先の章  
で、②を記した太郎はアヤ子と肉体関係を持ったことを懺悔して  
いるのではなく、アヤ子に精神的欲望を抱いてしまつてること  
に懺悔しているのだ。二人は肉体関係を結んだように読めるが、  
実際にそれを確定できるような描写は一切なく、あくまでも曖昧  
に書かれている。

②で太郎は「私が生きておりますのはアヤ子のためにこの上も  
無い罪悪です。」や「アヤ子の、なやましい瞳が、神様のような  
悲しみと悪魔のような(中略)明日にも悪魔の誘惑に負けるよう  
な事がありませぬうちに」などと、罪は太郎自身が犯すものであ  
り、アヤ子に罪は無いとしている。それに対し①では「私たちは、  
こうして私たちの肉体と靈魂を罰せねば、犯した罪の報償が出来  
ないのです。この離れ島の中で、私たち二人が犯した、それはそ  
れは恐ろしい悖戻の報責なのです。」というように、罪は二人で  
犯したものであるという事になっている。

また、②でははっきりと「太郎記す」と明記されているが、①

は非常に曖昧な署名がされている。③では「市川太郎／＼イチャカワアヤコ」と連名されている。太郎にとっては、自らを名乗ることは当たり前のことだが、①の筆者にとつては、名前を記さない理由があるのではないか。

婦人はつましい身なりをし、慎みと貞淑をもって身を飾るべきであり（中略）静かに、全く従順に学ぶべきです。婦人が教えたり、男の上に立ったりするのをわたしは許しません。むしろ、静かにしているべきです。なぜならば、アダムが最初に造られ、それからエバが造られたからです。しかも、アダムはだまされませんでした。が、女はだまされて、罪をおかしてしまいました。しかし婦人は、信仰と愛と清さを保ち続け、貞淑であるならば、子を産むことによって救われます。

（テモテ一 2・8～15）

この署名をしなかった理由のひとつに、聖書の女性は貞淑で自己主張することなく静かにすべきであるという教えを、①を書いた人物は尊重していたのではないかと推測があげられる。

②の筆者である太郎と、①の筆者の間には大きな精神性、思考の隔たりがあるように感じられる。①の筆者は聖書のこのような婦人に対して言及された箇所を強く念頭に置き、罪の観念や署名などを考えている様子も窺える。つまり、②と①の筆者は別人であり、②が太郎の筆によるものである以上、①を書いたのはアヤ子だと言えるのではないだろうか。聖書を読む際、太郎は男性の在り方について書かれている点を重視するし、アヤ子は女性につ

いて言及されている箇所に重きを置くだろう。聖書のどこの部分に重点を置くかという事は、二人の罪の観念が違っている原因になっているのだ。

では、①の手紙を記したのをアヤ子と仮定して、そこから見えるアイデンティティの乖離問題に言及したい。①も②も文中で罪を告白するとき、「私たち」と複数形の一人称を使っている。ふたりはお互いが自分たちの気持ちを相互理解し、代弁できていると思っっているのだ。これはお互いが同じ罪の意識を持っていると思っっているということにもつながる。しかし、前述したとおり、二人には何を罪と感じているかにズレがある。また、同じ聖書を読んでも、どの教えを重視しているかに大きな違いが見られた。ふたりは自分たちが一つのものと思っっているが、実際はすでに分離しており、別の「個」となっているのだ。

ここでモチーフとなったアダムとイブに再度焦点をあててみたい。アダムとイブは元々同質の一つのものであった。それが2つの別々の個となり、神によって両者別のアイデンティティを与えられた。

太郎とアヤ子は無人島という閉鎖空間の中、全く同じ環境・同じ教育を得、接触を持つことのできる他人はお互いだけであった。そのような状況にも拘わらず、二人は違う精神性や思考を抱くようになった。幼い頃に無人島に漂流した時には同一のものであったはずの彼らのアイデンティティは、成長と共に別のものとなり、それぞれが「個」を確立している。男女を異質として教える聖書と同じ道筋を二人は歩んでいる。

しかしここで重要なのは、これらのことに本人たちは無自覚で

あり、自分たちは未だに同じものだと認識しているということである。別々の「個」としての成長は、二人の無意識下で起こっており、知らず知らずの内に二人は乖離している。このアイデンティティの差異が産まれた原因として、太郎とアヤ子が男女という元々異質の存在であることもあげられる。「個」確立や元々の性質の違いがあるにも関わらず、本人たちがそこに無自覚であるということが、①と②の手紙の間にある矛盾や違和感の正体なのだ。

## 5 おわりに

三通の手紙の中にある数多くの矛盾点は、夢野久作がこの小説に施したトリックである。手紙の順序、聖書、犯した罪、小説の構造、これら全てが統合されることで、この小説の決定不可能性が作り上げられている。更にその幾重もの仕掛けが効果的に、読みの細分化を促し、読み手をさらに困惑させていく。作者は意図的に多くの矛盾を物語内に散りばめることで、読者に推理を促しながらも決して解決できないミステリーを提示している。

しかし同時に、決定不可能性に終着点を見出せば、主題を探る事も不可能である。そこで、①の手紙と②の手紙の間にある矛盾に眼を向け、ここに書き手の精神や思考の差異を見つけた。これは、太郎とアヤ子の精神や思考の違いなのではないかと推測できる。

太郎とアヤ子は無人島という閉鎖空間の中、全く同じ条件で生活していた。しかし、成長するにつれ、二人には肉体的な違いが生まれ、そこから二人の罪が生じることとなる。同時に、その異

なる肉体の中には異なる精神が生まれていた。幼い頃に無人島に漂流した時には同一のものであったはずの彼らのアイデンティティは、成長と共に別のものとなり、それぞれが「個」を確立しているが、これらのことに本人たちは無自覚であり、自分たちは未だに同じものだとして認識している。肉体的な差は目で捉えることができるが、内面の違いは認識できず、二人は知らず知らずのうちに乖離してしまっていた。夢野久作は、この「個」の確立と乖離を聖書の教えやアダムのモチーフを巧みに利用しながら描いているのではないだろうか。

個人のアイデンティティの確立は、同じ条件下で成長しても起こるといふ結果や、「個」であるものがサンプリングになり下がることが、どこか精神実験のそれを彷彿させる。「瓶詰地獄」を依頼された日の作者の日記に「東京に精神文化研究所立つと、個人の思ひ立ち也。喜ばし」という言葉があるが、これが「瓶詰地獄」の着想に影響を与えたのではないだろうか。この小説には、人間の精神を研究すること、異常精神について、書簡体「地獄」、兄妹の愛、夢野久作文学を語る上で必要不可欠な要素が全て揃っている。職業作家として活動を始めたごく初期に書かれたものではあるが、後の夢野久作作品に繋がる様々なテーマが隠れている。このことも、「瓶詰地獄」が夢野久作の短篇作品のなかでも特に高い評価を承けている理由だと考える。

## 注

(1) 「瓶詰地獄」の評価を高めは同時代評としては、その他に江戸川乱歩「夢野久作氏とその作品」、「探偵春秋」一九三七

年五月)がある。ここで江戸川乱歩は、手紙の順序が「顛倒」していることに注目し、幼少時代の手紙が作品の最後に示される構成が「非常に効果的」だと指摘している。

(2) 作品の具体的な矛盾や疑問点を最初に指摘したのは、由良君美「自然状態と脳髓地獄―夢野久作ノオト」(『現代詩手帖』一九七〇年五月)である。また、小平麻衣子「(研究へのいざない)夢野久作「瓶詰地獄」を読む」(『語文』二〇〇九年十二月)は、学生への問いかけ、および学生のコメントを踏まえての解説というかたちでこの問題を詳細に論じている。

(3) 江藤正顕は「瓶詰の地獄」論 夢野久作における〈猟奇〉の方法」(『敍説Ⅱ』二〇〇二年一月)において、「第二の瓶の内容」には、「その時に、私たちが持っていたもの」として「小さな新訳聖書が一冊」とあるが、それは後に続く箇所では、「詩篇の処を聞いてあつた聖書」となっており、通常「詩篇」が「新約聖書」ではなく「旧約聖書」に属することから言えば、矛盾ではないかと考えられるが、ただ「新約」にも付録として「詩篇」がついているものもあるので、それだけでは必ずしも矛盾とはいえないだろう。(中略)本質的には、失楽園、楽園追放がここでは楽園に居ながら近親相姦の〈性〉によって地獄に変わる、という「聖書」のドラマがどうしても作品にとつて要請されねばならなかったからである。「瓶詰地獄」は、南洋絶海の孤島における「最後の審判」という、一切の無駄を省き、極端に単純化そして抽象化したかたちで人類の存在形式のその核心部分を語っている。そこ

には決して「聖書」でなければならぬ必然性などない。問題は、〈絶対性〉ということにこそあるというべきである」と述べている。

※本論では夢野久作『夢野久作全集(8)』(ちくま文庫、一九九二年)を底本としている。聖書に関しては、共同訳聖書実行委員会訳『聖書 新共同訳―旧約聖書統編つき』(日本聖書協会、一九八七年)を参照した。

(おおしまこずえ 学部在學生)